

# 飼育カバの母子関係及び子の動物園間移動に伴う行動変化

倉 璃々加

【目的】神戸市立王子動物園（以下「王子動物園」）で誕生から2歳まで母親と一緒に暮らしてきたカバ (*Hippopotamus amphibius*) の出目吉は、母親から分離されて姫路市立動物園へ移動した。本研究では出目吉を対象とした動物園間移動の前後の行動の比較研究を実施した。動物園間移動の行動の比較研究は今までされたことがなく、この研究は展示動物の管理の点で意義のあるものといえる。本研究の目的は、2歳齢のカバの母子の相互交渉を定量的に評価すること、出目吉の動物園間移動に伴う行動変化を詳細に記録し、動物園間移動が飼育動物に与える影響を検討することであった。

【方法】本研究の観察場所は王子動物園と姫路市立動物園であった。観察対象個体は王子動物園では母親のナミコ（24歳齢）と息子の出目吉であり、姫路市立動物園では出目吉のみであった。出目吉は観察開始時の2016年10月17日には2歳齢であった。調査期間を出目吉の「移動前の母との同居期間」（1カ月間）、「移動前の母からの分離期間」（2週間）、「移動後の期間」（11カ月間）の3つに分けた。各期間の観察日数はそれぞれ9日間（20.0時間）、3日間（7.3時間）、17日間（40.3時間）であった。「移動前の母からの分離期間」では出目吉とナミコは別々の部屋で飼育されていたが、お互いの部屋の仕切りに頭を寄せ、口での接触は可能であった。

【結果・考察】「移動前の母との同居期間」では、金（2014）の研究の1歳齢の子カバで観察されたカバが開いた口をぶつけ合う遊びの行動である Jaw clashing や授乳が2歳齢の出目吉でも見られ、その生起率や行動の様子が1歳齢と同様であった（Jaw clashing: 11%, 授乳: 5%）。このことから離乳前の2歳齢の子カバであっても、母親からの独立度合いは1歳齢の子カバのものと大きく変わらないことが示された。

「移動前の母との同居期間」と「移動前の母からの分離期間」を比較すると、出目吉とナミコは共に分離期間では水にいる割合が減少していた。その原因は分離後には、母子ともに相手の部屋に隣接するドアへの探索が増えたためである。カバは水中で出産を行うことから、安心のできる場所である。そのため、母子分離時には、母子ともに水にいる割合が増加することが予想される。しかし本研究では、分離時に安全や安心感を得るためには、母子が互いに近くにしようとするのが水の中にいることより優先された。

「移動前の母との同居期間」と「移動後の期間」を比較し、出目吉の移動後の変化について調べた。移動直後の2週間では採食と探索の生起率やあくびの生起頻度は大きく減少し、水中にいる時間が82%から92%へと増えた。つまり移動直後、出目吉は水中に身をひそめていることがほとんどだった。出目吉は新奇な状況や状態に対し不安を感じていたため、カバにとって安全地帯である水に身を潜めていたと考えられる。しかし、移動後3週間から移動後11カ月の期間では水にいる割合は減少し、採食と探索の生起率やあくびの生起頻度は増加し、移動後11カ月後には移動前と同様の値を示した。姫路市立動物園では以前からメスのカバのキボコが飼育されている。キボコの飼育部屋と出目吉の飼育部屋の仕切りに出目吉はアゴを寄せキボコと口同士を接触させる、来園者がいる際に来園者側の柵にアゴを乗せて口を接触させるなどの行動も見られた。口を接触させる行動は、移動前に出目吉は母親のナミコと行っていたため、親和的な意味がある行動と考えられる。上記の様子から移動後3週間で、出目吉は新しい環境に慣れ、周囲に興味関心を持つようになったといえる。

本研究より2歳齢の子カバの母親からの独立の度合いは1歳齢以下の子カバと同様であること、カバの母子は互いに近接していることが個体の安全において最優先されることが示された。さらに飼育動物は動物園を移動し、移動後3週間で新しい環境に慣れることが定量的に実証された。（比較行動学）